



六甲カトリック教会 教会報



あなたの靴を脱ぎなさい(出 3,5)

主任司祭 英 隆一朗, s. j.



今年2月にアジア大陸のシノドスの会儀が行われ、その報告文書が出た。文書全体はアジアの教会全体の現在の状況が見えてきて、興味深いものがある。全貌は紹介できないが、その中で特徴的な表現が出てくる。「あなたの靴を脱ぎなさい」(出 3,5) という聖句である。モーセが重大な使命を受ける前、燃える柴の中に神を見たとき、神聖な場なので靴を脱ぐように示唆される場面である。アジアに共通する習慣として、家や宗教施設に入るとき、靴を脱ぐ。この靴を脱ぐ習慣を、アジアのカトリック霊性の一つの特徴的表現としているのだ。

確かに日本では、靴を脱ぐことによって、ウチとソトを区切り、ウチなる空間でくつろぐようになっている。衛生的にもよい習慣だ。さらに、靴を脱ぐのは、ウチにおられる神さまの前に出るからだと言われている。靴を脱いで汚れを落とし、赤心をもって神の前に身をおくことが大切なのだ。

現在のカトリック教会では靴を脱ぐところはほとんど見当たらない。それでも、聖堂に入るとき、心の靴を脱いで、つまり、心の兜をとって、ありのままの心で神に出会いたい。また、1日に1回は、心の靴を脱いで、落ち着いた心で神の前で祈ることを習慣にしてみるとよいと思う。

シノドス文書では、靴を脱いで裸足になって、大地の感触をじかに味わってみるように勧められている。それは、大地と直接つながることによって、その上にある大自然の大切さを思い出し、エコロジーを意識した生き方を養うためである。また、大地に根づいているアジアの文化の価値を改めて思い起こすことにもつながっていく。その中でも、大地に生きている貧しい人びとの苦しみを足裏で共感することも求められている。アジアの文化と宗教の多様性を思い巡らし、その中で、私たちクリスチャンの生き方を味わい直してみたいものだ。

教会の種々の集まりでも、靴を脱いで交わるような気軽さがあるとよいだろう。壮年会が新たに活動を始めたので、35歳以上70歳未満の男性の方で参加してみたい方はぜひご参加ください(主任司祭まで)。主日ミサでホスチアを奉納する奉仕者を募集しています。簡単ですが、大切な奉仕です(事務室まで申し出てください)。すべての奉仕が靴を脱ぐ謙遜な心から行われていきますように。

《 年次報告会 》

6月4日（日）10時ミサに引き続き、年次報告会が開かれた。

今回は財務報告とともに施設管理部からも報告事項があり、更に主任司祭からの今後の教会の方向付けなどのお話があった。教会の財務状況については蛭田財務部担当からの説明で、コロナの影響を潜り抜けて全体的に献金等が少なくなっているが、2022年度には篤志家からの寄付があり、その分で収入は前々年度並みの5,000万円台を得た。支出では教会活動の活発化、老朽化している施設修繕費、物価高反映などでやはり高騰、4,200万円台の出費であった。収支はかろうじて黒字になっているが、収入面の篤志家の寄付に負うところが大きい。信徒の漸減で今後も厳しい財務状況であることには変わりはない、との報告があった。

施設管理部からは、2022年度はほぼ予算通りの支出であったが、本年度は多数の補修、改修工事が必要となる。ガス給湯器の交換、ベルシステムの改修、高圧受変電設備の更新を5～6月に実施し、小聖堂前の池の改修、駐車場西面のフェンス改修、エントランス部舗装の補修、屋上防水シートの点検と補修を本年度事業として計画している。また、聖堂内の音響の改善、電話およびWiFi環境の整備、AEDの設置、藤棚下の整備などの検討、さらに教会設備の老朽化に対する長期的な計画を立案する必要がある一との報告があった。

それらを踏まえて英主任司祭は、就任以来最初の年次報告会でもあるので、イエズス会の方向性やシノドスの動きを見据えて、六甲教会の今後の課題と方針を多項目にわたって縷々お話をされた。

《 六甲教会 青年会を発足させて 》

20代や30代前半の青年たちは、多くの困惑を感じることもあるかもしれない。大学では研究科に進学するかどうかの判断や、どのポストを選ぶかなどの悩みを抱える。就職した後、まだ経験が浅く、先輩や上司との関係や現在の仕事を続けるか転職するかなど、生活の中で悩むことが多い。

この年代になると、社会と初めて接触し始め、学生時代の良い成績が優秀生としての評価基準ではなくなりつつある。同時に、複雑な社会の側面や出会う人々の人間性にも触れ合うようになったが、自分がどのように行動すべきか分からないという状況である。

このような状況に置かれた時、一人で悩んだり孤独を感じたりせず、自分を最も熟知している友人や家族としての神、イエスを忘れないでいてほしい。

イエスのくびきは負いやすく、主の荷は軽いからである。人生で最も落ち込んだ時でも、主は私たちと出会ってくださる。疲れ果てた時こそ、神が働き始めるのである。

しかし、イエスを信頼したいと思っても、久しく祈っていなかったことを心配することがあるかも知れない。六甲教会の青年会は、まさに若者たちがイエスと親密に交流する方法を教えてくれる場である。英神父の主導の下で、毎月の第一、第三の土曜日の19時に信徒会館で集会を開いている。

第一の土曜日には、指定された聖書の読み聞かせや分かち合いが行われる。イエスへの理解を深め、同年代の悩みを互いに交流できるチャンスも獲得できる。聖書の内容に対する誤解や信仰への困惑など、「不適切」と思われる見方も自由に提出でき、メンバー同士で議論し合い、神父様から丁寧かつ親切な解答をいただくことができる。第三の土曜日に、様々な主題をめぐってパーティーのような活動が行われる。

若い年代の兄弟姉妹よ、ぜひ青年会に参加してみてください。イエスは家出の次男を待っているように、私たちを待ち望んでいるからである。未信者の方も大歓迎である。(楊 慧)

ボランティアグループ(7)「荒野の泉」について

これまで六甲教会チャリティーバザーに於いて、社会活動部の協でパキスタンのハンディキャップを持つ子供達の施設ラハトガ（癒しの家）のブースを出展してきましたが、御協力



くださった皆様に心より感謝申し上げますと共に、この場をお借りしてその支援を終えた事をご報告させていただきます。永年に亘りその施設長をされたブラザー松本が、2年前に日本に戻られたのを期に終えると同時に、代わって今後は「荒野の泉（あれののいずみ）」の活動を応援致す事となりました。

思い返すと、夫の仕事に随行して、イスラム色の強いカラチで過した当時、ラハトガの施設の世話と同時に、僻地で婦女子の為に識字教育をされていたワイアット桂子さんと云うクリスチャンで大阪出身の得難い友人を私は得ました。彼女はアフガニスタン寄りのクエッタという僻地で寺子屋のように読み書きを教えるところで教師をしておられ、御夫君のワイアットさんは、聖書を土地の言葉に翻訳したりされ乍ら、婦人達の特技であった刺繍の仕事を与えて、彼らの生計を助けておられる現場に何度かお邪魔致しました。

その後クリスチャンであるご夫婦（写真）は、活動拠点を治安の悪いクエッタからインドに移し、デリーで、タリバン政権を逃れたアフガン難民などのお世話をしながら、神様を知らない人々の為に、常に良き働きをされていました。

コロナの蔓延で止む無くデリーを去って大阪に戻って来られていますが、そのネットワークは今も続き、多くの異邦人の助けとなっております。

そんな中、昨秋行われた教会バザーでは、私事で恐縮ですが、その直前に夫の帰天などがあり準備が出来ていなかった私のブースに、桂子さんは自らもそこに立って手伝ってくださいました。ラハトガの支援の為にいただいた、懐かしいクエッタの刺繍の製品を並べて販売しました。福音宣教などとは縁遠い私ですが、ワイアット桂子さん夫妻はそれを実践されている私の敬愛する方達で、関わっておられるのが「荒野の泉」です。（金子 淳子）

教会学校遠足<灘浜サイエンススクエアへ>

教会学校では年間を通して夏のキャンプ・納涼の夕べ・バザー・春、秋の練成会・クリスマス会などいろいろな行事を行っています。そんな行事の中のひとつである春の遠足に、先日6月4日に行ってきました。以下にその様子をお伝えしたいと思います。

今回は灘浜サイエンススクエアに行きました。10時のミサに与った後、教会を出発し都賀川沿いを歩いていきました。雨で川が増水したら危なくて歩け



ないので天候とにらめっこでしたが、遠足2日前からそれまでの雨が嘘のようにあがり無事に行くことができました。1年生から5年生までの子どもたちが全員40分の道のりを歩きました。皆ほがらかで元気いっぱいでした。

子供たちはお弁当の後のおやつ交換にはしゃぎ、施設内の色々な実験に興味深く参加し、楽しいひと時を過ごしました。とても有意義な一日だったと思います。

（教会学校リーダー 七種穂乃郁）



兵庫・生と死を考える会 月例会

6月18日、六甲教会イグナチオホールで「兵庫・生と死を考える会」(会長 高木慶子シスター)の月例会が開かれ、主任司祭 英 隆一朗神父が『教会の活動からみた死生観』をテーマに講演を行われました。

英神父は、かつての日本には先祖を大切に、死は地域の共同体の中でともに悲しみ祈りを捧げるものという伝統的な文化、死生観がありました。現代の日本人はそれを失ってしまった、そのため、身近な人の死を、自分あるいは家族だけで、全く無防備なままに受け止めざるを得ない、そういう“むき出し”の現実世界の中で人は苦しむのだとされました。今はグリーフケアなどさまざまな癒しの場もありますが、宗教「religion」(再びつなぐの意)は、共同体としてともに人の死を受け止め、儀式の中で癒しと回復の力を与えられていくものであるとし、キリスト者としては自分の命を超える永遠の命への気づきのチャンスが与えられていることを知り、自分の生きる意味に自分なりの答えを見出し、今こそ信仰に生きることを考えてみましょうとされました。

「兵庫・生と死を考える会」は原則として第三日曜日の13時半から15時まで、六甲カトリック教会を会場に月例会が持たれます。月例会参加費は一般700円、会員500円。事前申し込みは不要。入会希望の方はホームページから。(http://www.portnet.ne.jp/~seitoshi/) 次回月例会は7月16日開催。テーマは、「赤ちゃんを喪うグリーフ～流産・死産・新生児死～」。講師は神戸赤十字病院心療内科部長 村上典子氏。

私の好きな聖書のことば

楊 慧 (聖名:テレサ)

『疲れた者、重荷を負う者は、私のもとに来なさい。
休ませてあげよう。』(マタイ11;28)

ある日、故郷の友人から電話がかかってきました。「私が首になった」と告げられました。

その友人は中学時代のクラスメートで、北京理工大学(東京工業大学と同じレベル)の修士課程を卒業した後、IT業界の大手企業に就職し、初任給として額面40万円(780万円)ほどをもらっていました。彼が所属していた業界や待遇に羨望の念を抱いていたことが、まるで昨日のこのようですが、わずか2、3年の間に、彼が失業するというニュースを聞くことになるとは非常に驚きました。

今の時代において、終身雇用制度を採用している企業は、中国では全体の半数以下しか存在していないのです。専門的な能力を持つ人たちさえ失職のリスクが高くなっています。文系出身の私のような人間にとっては、ますます不安が増すばかりです。将来について心配し、イライラしている時、私はしばしば聖書の言葉、「マタイ11;28」を思い出します。主は私を聖書を通じて慰めてくださったのです。

私は一人で人生の苦難に直面しているわけではなく、イエスは常に私と共に戦ってくれています。例えば、私は過去に、模擬試験で数回低い点数を取りましたが、大学入試では普段より優れた成績を収めました。私はこれまで、短い人生の旅の中で何度も主の言葉を実際に体験してきました。職業生涯も必ず主の加護を受けることになるでしょう。このように考えると、不安な未来に立ち向かう勇気が生まれてきます。

兄弟姉妹たちよ、生活の中で疲れを感じたり、苦境を乗り越えられない時は、主の元に帰りましょう。「そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる(マタイ11;29)」からです。



《 図書室からのお知らせ 》

5月に入った図書

2冊の本が 中村神父さまから提供されました。

☆ キリストとともに 阿部仲麻呂著 オリエンズ宗教研究所 (2023年4月刊)

これだけ分かりやすく、温かい、羽のように軽やかに舞う神学書は 世界にも例を見ないのではないのでしょうか。

——援助会 Sr.原による解説より

日々の生活の中で<あったかさ>を感じる事例を(おもい・つながり・たべること・いのち・あったかさ・うつくしさ・やすらぎ・つつみこむこと・さがしもとめること・さけび・よろこび・ふるさと)の12のテーマで、目に見えなくともその奥にある「神さまのぬくもり」にこころの目を開かせてくれます。

——白浜司教 推薦評より

☆ 深き淵より 現代に語りかける詩篇 B.W.アンダーソン著 中村健三訳 新教出版社(1989年刊)

聖書の多くは「人間の言葉を使って語られた神のみことば」ですが、詩篇は人々の苦悩における嘆きの叫び 解放に際しての感謝の心を 神の摂理の善良さや喜びを 神を称える賛美を・・・ すなわち私たちの祈りのあり方を教えてくれます。この本は詩篇についてではなく、詩篇そのものへの案内を狙っている。

——序言から

《図書室の様様替え…について》

- ・超ゆっくりペースで進んでいます。お気付きのことやご希望などがありましたら、図書室入口横にある投書箱にてお知らせください。

◆社会活動部 今月の予定

7月2日(日) 10時ミサ後 かなの家 出店 (イグナチオ喫茶で)

7月8日(土) 10:00～ 炊き出し (中央教会内 活動センター台所)

7月31日(月) 9:30～ ともしび会 教会台所 (児童養護施設の子どもたちへのケーキ作り)

今月の聖人 イエズス会の5人の聖人・福者

7月2日にはイエズス会の5人がまとめて列聖、列福されています。いずれも16,17世紀のイタリアまたはフランスの司祭です。年代順に、聖ベルナルディーノ・レアリーノ(伊)、聖ヨハンネ・フランシスコ・レジ(仏)、聖フランチェスコ・ヒエロニモ(伊)、福者ユリアーノ・モノア(仏)、福者アントニオ・バルディヌッチ(伊)の5人です。5人の共通点はそれぞれ辺境の地をもいとわず、長年宣教活動をおこなったというもので、司牧の大切さを顧みることにつながります。この5人については死んだ子どもを生き返らせたとか失った小麦を出現させたとか、奇跡を行なった伝説がありますが、あまたの人々に神の教えを説き、その延長線上にイエズス会の信仰の世界制覇に貢献したということが大きいのでしょう。例えばモノアは当時未開の地であったフランス・ブルターニュ地方で熱心に宣教を行い、のちに日本へ来たド・ロ神父(写真)のような人物を生みました。(詫 洋一記)



パイプオルガンのこと～その1～



いつもミサの時に、音が鳴っているオルガン。あのオルガンが来る前は大きなエレクトーンのような電子オルガンと祭壇両脇のスピーカーがありました。今から13年前の2010年6月に日本キリスト教団東梅田教会から、バラバラに分解されて運ばれてきました。(2020年12月教会報参照)。

今回は少し珍しい写真をお見せしたいと思います。

オルガンを組み立てている時の写真です。

左の写真は枠しかありません。右の写真はパイプが順番に棚に並べられています。

このオルガンには500本ほどのパイプがあります。全てが指でおさえる穴のないリコーダーの様なもの。1本のパイプから一つの音が出ます。一つのストップ(音を変化させるノブ)につき鍵盤数のパイプが長いものから短いものまで並んでいます。オルガンの裏に箱が2つ並んでいるのをご覧になったことはありますか？どうぞ、一度そっと覗いてみてください。立方体の箱の中にはモーターが入っています。長細い箱の中にはふいごが入っています。

モーターから空気がふいごに送られ、その空気が並べられた笛の下の密閉された箱に貯められます。演奏者が押した鍵盤からつながる弁が開くと、ストップを引いた音色の笛に空気が入り音が鳴ります。鍵盤があるのでピアノと同じ様に思いますが、管楽器と同じ様に空気で音が鳴っているのです。そう思って聴くとブラスバンドの様に聞こえるかもしれませんね。

7月16日にはオルガン移設お披露目演奏会で演奏して下さった久保田清二氏のお嬢さんの真矢さんが「祈りと音楽の集い」で、バッハその他の独奏曲を演奏して下さいます。

オルガンの＜風＞の息吹をお聴きください。(オルガン奉仕者 三浦優子)

＜神戸地区社会活動委員会主催＞～カトリック社会活動神戸センター支援～

クリスマスチャリティーコンサート2023 出演者募集！

日時：2023年12月2日(土)午後1～4時

場所：カトリック神戸中央教会(主聖堂)

申込締切日：8月12日

問い合わせ先：神戸地区社会活動委員会事務局 TEL/FAX 078-221-4733

・募集内容は「いのちと平和」がテーマのもの、あるいはクリスマスにちなんだ演奏、演芸等です。詳しくは、六甲教会掲示板のポスターをご覧ください。

・参加希望グループは、代表者1名が9月3日(日)午後2時から神戸中央教会(集会室4)で行われる打ち合わせ会に必ず出席してください。

六甲春秋 祈れ働け

暑い日が続く。冬物と夏の衣服を入れ替え、洗濯にも汗を流している。日本には四季折々の装いがあり、単なる必要に迫られてというより、快適さや美観も考えて各自があれこれ工夫することになる。その手間や煩いは自分持ちではあるが。私には暑い夏の迫りを実感する嬉しい年中行事である。

さて7月11日に教会は、聖ベネディクトの祝日を記念する。彼は5世紀の終わりにイタリアに生まれた。人里離れた広大な山野を汗水を流して開墾し、蛮族を寄せ付けない高い壁を巡らせ、自らの労働による自給自足の大きな修道院を築き、ヨーロッパの文化・技術を守った人と言われる。西方教会では修道生活の父と称えられ、以後の修道生活に大きな影響を与えた。一つの厳格な戒律のもとに、共同生活を何よりも大切にした。祈れ働けというモットーのもと、修道者たちは聖堂で早朝4時から祈りを始め、夜に至るまで時課と言われる7回に及ぶ共同の祈りを厳守した。私がドイツに行った当初、かつてベネディクト会が所有していたマリアラーハ（マリアの湖）の広大な敷地に驚いた。またローマで学んでいた時、彼のゆかりの地・スビヤコで自分の年の黙想をした事があったが、時課を共にし、グレゴリオ聖歌を修道士さんと一緒に歌った。朝食は立ったままで摂り、昼食には各自にブドウ酒がフレスコ入りで用意されていたが、アルコールを飲めない会員の隣には好きな者がちゃっかり座っていたようだ。

日本では専らトラピスト修道会として、男女ともにしっかりした理念と生活によってイエスの福音を証ししている。私は不思議な御縁でトラピストの修道院と数々の関わりがあったので、自分の体験を少し分かち合うことにしよう。

函館のトラピスト修道院で別の黙想指導をした折り、修道士たちは聖堂に集って夜の時課を捧げ、函館湾の海上では眩しい燈火を付けたイカ捕り漁船の群れが働いていた。そのコントラストの妙に驚いた。夏ではあり、多くの観光バスが訪れ、その対応に会員は追われていた。バターやクッキーで有名だが、ほとんどは会員ではない外部の従業員の手に依るものという。どういう訳か、那須のトラピスチンとは関わりが深かった。フランス人のチャプレンが高齢のためもあってか、足繫く通った。野良仕事、杉の木の下枝を切る、高い樹に登るなど、生まれて初めての仕事も多かった。ここでは菓子のガレットが有名だが、その混ぜ合わせの分量や時間は絶妙で二人のシスターしかできないとか。かつては20頭ほどの乳牛を飼っていたので、時に全員が総出で牧草を集めサイロに収めた。また記憶に焼き付けられているのは、院内の片隅に松林に囲まれた墓地があったが、各自の十字架にただ誕生と入会と帰天の日のみが記されており、むしろ強くその人の生涯の起伏が思いやられた。また聖週間の典礼を無事に終わり、新宿の雑踏にもまれて感じた違和感・聖と俗との全き分離や交点の無さの実感も忘れ難い。



中村健三 合掌

◆お知らせ◆

・7月9日に10時ミサ後、イグナチオホールで新受洗者・転入者のみなさんを対象に、六甲教会共同体についての説明会があります。ご家族・代父母の皆さまも一緒にご参加ください。以前に受洗された方、転入者の方で説明会は初めてという皆さんもどうぞ。

【2023年7月行事予定表】

日	月	火	水	木	金	土
						1
						福者ペトロ岐部司祭と187殉教者 ◎教会学校
2	3	4	5	6	7	8
年間第13主日 手話ミサ、ミサ後交流会 小教区評議会 12:00 侍者練成会 13:30	聖トマ使徒				初金曜日ミサ 7:00 10:00 聖体顕示	典礼部会 10:00 社会活動部 炊き出し
9	10	11	12	13	14	15
年間第14主日 新受洗者・転入者説明会 10:00 ミサ後 ◎日曜班						教会学校終業式
16	17	18	19	20	21	22
年間第15主日 地区役員会 11:30 祈りと音楽の集い 14:00 開演					◎東灘南	聖マリア (マグラダ)
23	24	25	26	27	28	29
年間第16主日 祖父母と高齢者のための世界祈願日	◎定期清掃	聖ヤコブ使徒				
30	31					
年間第17主日	聖イグナチオ(ロヨラ)司祭					

◎は掃除当番（暴風雨など悪天候により朝7時の時点で警報等発令があれば中止となります）

編集後記 教会清掃奉仕の人が少し増えている地区もあるようです。当番以外の日にも、一人もくもくと清掃奉仕して下さる方もおられます。教会をきれいにしようという、一人一人のちょっとした心がけで快適に過ごせます。まずは足もとのゴミをひとつ拾うところから！（N.O.）

<p>・次回8月号の発行は7月29日(土)です。 原稿は毎月15日ごろまでに、教会受付へ直接ご持参いただくか、FAX、メールでお願い致します。 (renraku@rokko-catholic.jp) 皆さまからのご寄稿をお待ちしています。 教会SNSチームは、フェイスブック、インスタグラム、ツイッター、YouTubeチャンネルで配信しています。「六甲カトリック教会」で検索してみてください。</p>	<p>六甲カトリック教会 〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21 電話 078-851-2846 FAX 078-851-9023 http://www.rokko-catholic.jp 発行責任者 英 隆一朗 編 集 広 報 部</p>
---	--